

交響詩からオペラへ、 70年を超える創作活動

文・山田治生(音楽評論家)



青年期のシュトラウス

リヒャルト・シュトラウスは、80歳を超えても「メタモルフォーゼン」や「4つの最後の歌」などの傑作を書き続けていたことで知られているが、彼は、早熟の作曲家でもあった。

1864年、ミュンヘン生まれ。彼の父親フランツ・シュトラウスは、ミュンヘン宮廷歌劇場管弦楽団の首席ホルン奏者として、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」と「ニュルンベルクのマイスター・ジング」の世界初演にも招かれるほどの名手であった。しかし彼自身はアンチ・ワグネリアンであり、モーツアルトなどの古典派音樂を好んだ。一方、母親のヨゼファは、ミュンヘンの届指のビール醸造業者ブショール家の娘であつた。

リヒャルトは、父親から音樂の手解きを受けた。モーツアルティアンであったフランツは、新しい音樂には目もくれず、嚴格に古典音樂のみを教えようとした。リヒャルトは幼い頃からピアノとヴァイオリンを習い、よく父のホルンのピアノ伴は、ミュンヘンの届指のビール醸造業者ブショール家の娘であつた。

奏をしたという。作曲は、11歳から宮廷樂長のフリードリヒ・ヴィルヘルム・マイヤーに学んだ。1876年に「祝典行進曲」を作曲し、それは1881年に作品1として出版された。1880年には早くも、「弦樂四重奏曲イ長調」と「交響曲二短調」を作曲。1881年5月には「交響曲三短調」がヘルマン・レヴィ指揮ミュンヘン宮廷歌劇場管弦楽団によって初演された。シュトラウスはまだ16歳の若さであった。「5つの小品」は1881年に作曲され、作品3の番号付された。

1882年にギムナジウムを卒業したシュトラウスは、ミュンヘン大学哲学科に入る(しかし、音樂活動のため翌年には大學をやめてしまう)。「13管樂器のためのセレナード」は、1882年に作曲され、同年11月、ドレスデンで「フランツ・ヴェルナー」が指揮する同地の宮廷管弦樂團のメンバーによつて初演された。その後、ハンス・フォン・ビューローがこの「セレナード」に注目し、1883年12月にマイニンゲン宮廷管弦樂團で取り上げた。このときはクラリネットに「ラームスと親交のあるリヒャルト・ミュールフェルト」やホルンに「ホルン協奏曲第1番の完全な形での初演を吹くことになる」グスタフ・ラインホルスも参加している。そしてビューローは1884年のマイニンゲン宮廷管弦樂團のベルリン・ツィアードの際にも「セレナード」を持って行った。「セレナード」をきっかけに、ビューローによって認められたシュトラウスは、1885年にマイニンゲンの宮廷管弦樂團でビューローのアシスタントを務めるようになり、指揮者としての活動を始める。

作曲家としてのキャリアの初期には「シェロ・ソナタ」や「ピアノ四重奏曲」などの室内樂作品の作曲にも取り組んだ。「ヴァイオリント・ソナタ」は初期の室内樂曲創作の最後を締め括る名作。1888年、作曲者24歳のときに書かれたが、後の彼の作品を彷彿とさせ、その早熟ぶりに驚かされる。

1894年には出世作といべき交響詩「ドン・ファン」が初演され、成功を収める。その後、「死と変容」(1890)、「ティル・オイレンシュビーゲルの愉快ないたずら」などの作品に彼女の姿が素材として使われている。

1894年、シュトラウスは、14世紀のドイツに実在したといつ伝説的ないだら者であるティル・オイレンシュビーゲルを主人公としたオペラを作曲する構想を持っていたが、最初のオペラ「グントラム」を初演したものの成功を収めることができず、オペラ化を諦め、それを新たに交響詩「ティル・オイレンシュビーゲルの愉快ないたずら」として創作した。

「ドン・キホーテ」を書いた頃、シュトラウスは故郷ミュンヘンの宮廷歌劇場の指揮者を務めていた。1898年3月にケルンで「ドン・キホーテ」の初演があつた後、同年11月にベルリンの宮廷歌劇場の樂長となる。そして1899年3月にフランスフルトで交響詩の集成として書いた自伝的な「英雄の生涯」を書いた。



パウリーネ・シュトラウス・デ・アーナ



ハンス・フォン・ビューロー

「生涯」を自らの指揮で初演する「英雄の生涯」によって交響詩を卒業したシュトラウスは、創作の中心にオペラを置くようになる。ただし、オペラの時代においても、「家庭交響曲」(1904)や「アルプス交響曲」(1915)を書いている。

指揮者としてのシュトラウスは、マイニンゲン、ミュンヘン、ワイマール、ドレスデンなどの歌劇場で経験を積み、ベルリン宮廷歌劇場の樂長やウェイン国立歌劇場の音樂監督を歴任した。そして、ベルリン・フィル、ウェイン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦樂團などのオーケストラも指揮していた。

1905年、3作目のオペラ「オスカーウィルドの戯曲を原作とする「サロメ」がドレスデン宮廷歌劇場で初演され、サロメの「7つのヴェールの踊り」やヨカナンの首切りなどでセンセーションを巻き起こす。1905年の「サロメ」と1909年のギリシャ悲劇を原作とした「エレクトラ」の成功により、ワーグナーの後継者と目されるようになつたが、「サロメ」や「エレクトラ」の前半を交響詩に、後半をオペラにあてたのであった。

1916年には、新古典主義的な小編成のオーケストラを用いたオペラ「ナクソス島のアリアドネ」を発表。その後も、「影のない女」(1919)、「インテルヌッソ」(1924)、「エジプトのヘラ」(1928)、「アラベラ」(1933)、「無口な女」(1935)、「平和の一日」(1938)、「ダフネ」(1938)、「ダナエの愛」(初演は作曲者死後)、「ナウル」(1952)などのオペラを博し、その年だけで50回以上の再演があり、この作品を観るためにベルリンからドレスデン行きの特別列車が運行されるほどの大ヒットとなつた。

「バーラの騎士」は、若い貴族オクタヴィアンと不倫関係にあつた元帥夫人が、ゾフィーという若い娘の出現により、オクタヴィアンから身を引くというストーリー。1911年1月、ドレスデン宮廷歌劇場での「バーラの騎士」の初演は、大きな成功を収めた。このオペラの、銀のばらの献呈場面、オックスのワルツ、最後の元帥夫人、オタヴィアン、ゾフィーの三重唱などが人気を博し、その年だけで50回以上の再演があり、この作品を観るためにベルリンからドレスデン行きの特別列車が運行されるほどの大ヒットとなつた。

「バーラの騎士」が初演される。

「シャーラク」とともにウイーン国立歌劇場の音楽監督となる。「影のない女」が初演される。

「英雄の生涯」が初演される。

「サロメ」が初演される。

「エレクトラ」が初演される。

「エクトラ」が初演される。

「バーラの騎士」が初演される。

「ドン・ファン」が初演される。

「4つの最後の歌」を作曲。

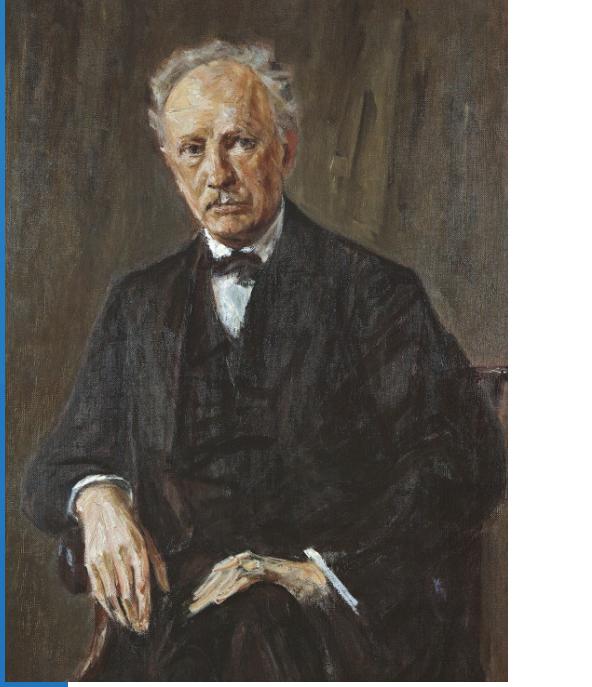
1942年 ドイツのガルミッシュで死去。

書かれた前奏曲は、しばしば単独で、室内樂コンサートなどで演奏される。

80歳を超えてからは、「カブリッヂョ」(1942)。台本は高名な指揮者クラリネットと「ゴットのための小協奏曲」、「4つの最後の歌」などで最晩年の境地をひらく。

「メタモルフォーゼン」は、1945年に第二次世界大戦によって破壊された故郷ミュンヘンやドイツへの悲しみをこめて作曲された。23の独奏弦樂器(ヴァイオリン10、ヴィオラ5、チェロ5、コントラバス3)のために書かれたこの作品は、最後の部分に「追悼」と記され、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」の第2樂章・葬送進行曲のテーマが引用される。ある意味、祖国へのレクイエムである。

「4つの最後の歌」は、シュトラウスの絶筆といえる作品である。「4つの最後の歌」の最初の3曲は、ヘルマン・ヘッセの詩によるもので、繊細かつ多彩な管弦楽法が魅力的である。この4曲は1948年に作曲されたが翌1949年9月8日、シュトラウスはこれらの初演を聴くことなく、ドイツのガルミッシュで亡くなつてしまふ。「4つの最後の歌」の初演は1950年5月22日、ロンドンで、ヴィルヘルム・フルトヴァンゲラーの指揮、キルステン・フラグスターの独唱によって行われた。



晩年のシュトラウス(画:マックス・リーバーマン)

Richard Georg Strauss